

うちとられたる愛兒の首を、  
ふとこゝろあたたか 懐だ温たく抱だきしめてゐた。

母の子を愛するもよし、  
 人の子を戀するもよし、  
 狂ふまで、狂ふまで愛するものの、  
 心のさちを讚めたゝへやよ。

開幕ささもに、鞆たもとの尼、吾子が生前に愛玩したる小車に吾子の  
 されかうべうへをのせて引來る。衣は美しく、みめもよし。

「どくろの尼」

重衡が寺僧うつとて火をかけし、  
 こゝなるが東大寺か、  
 かしこなるは興福寺か、  
 跡かたもなきこの荒涼よ。

父の罪、子にめぐりしか、  
 夫の非、妻にあらはれしか、  
 さても呪はしきこの世よ罪よ、  
 南無歸命頂禮阿彌陀佛。

されど寺はまた建てられん、  
 佛像は、また据えられん、  
 吾子のみは、このされかうべ、  
 抱けど呼べど、聲もなく笑みもなし。

斷罪の何故かくは苛しきぞ、  
 夫の罪、もし重からば、  
 夫のみに報いこそあれ、  
 うらめしきこの斂誅よ。

尼僧等四、五出て来る。

〔第一の尼〕

さても愚かしきかの姿態よ、  
 下臈にもあらず、なま尋常氣に、  
 どくろを抱いてさまようとは、  
 笑止の沙汰よ。

〔第二の尼〕

まことや、されかうべふところ、  
 抱きしめたる狂氣さよ、  
 念佛の誦讀もおかし、

下道の信よ、凡惱よ。

「一同の尼」

席おなじうしては、

この身の耻辱、涅槃の障り、

南無歸命頂禮、

我等を救ひたまへ。

尼僧等立去る。

「どくろの尼」

尼僧たちも我を捨て去る……

嘲笑よ、侮蔑よ、我にふりかゝれ、

愛のこゝろの狂亂は、  
吾子甦生を祈るのみ。

歸命頂禮彌陀如來、

どくろに生命しばしかせ、

土塊に息いぶきふき入れ、

人は生れしといふではないか、

柳枝の骨に泥塗つちりて、

人はあれしといふはまことか、

このされかうべ、このむくろ、  
 こはこれわが子いとしき子。

など甦生の許されざる、

中將の罪おもくとも、

わが罪のまた深くとも、

吾子には罪も怨もなし。

ごくろの尼、しきりに子のされかうべに口をあてて息を吹き  
 こむ、狂亂の態、

吹けども吹けども觸體おどらず、

抱けど抱けどむくろ冷めたし、

この身の息よ、絶えなば絶えね、

この身のぬくみ冷めなばさめよ。

わが息絶えて、吾子かへり、

わが身冷えて吾子のかへらば、

何をかうらみかなしまう。

何をかのろひ狂はうぞ。

ごくろは遂に動かず、失望の態や、久し、  
 つひにかなはねわがねがひ、

さらば如來よ阿彌陀佛、  
せめて蓮上の甦生を、  
われと我が子にゆるしませ。

ごくろの尼、疲憊したる姿に、されかうべを小車に乗せて押  
して行く。

「う た」

吾子よねむれ、どくろよねむれ、  
この日この世の甦生が、  
所詮かなはぬねがひなら、  
吾子よねむれ、どくろよねむれ。

十萬億土、西の遠、  
華上のちかひ、吾子よねむれ、  
どくろよねむれ母とはに、  
おん身のために守歌うたふ。  
ねむれ、ねむれ死のあこよ、  
うたひ車の鈴なる、  
ねむれねむれ、どくろのあこよ、  
はちすの花は赤と白。

白をやらうか、赤やろか、  
あせない色の白はちす、  
母と二人で安すけく住まう、  
ねむれよ。ねむれいとし子よ。

—幕—

### 常磐御前

弾く手をやめて象牙の義甲、  
抜きもやらずに思ひ入れば、  
泪ぐんだひとみに、また浮びくるは、  
こゝろ雄々しき常磐がすがた。

ふところのみどり子は乳をもとめてなくといふに、  
かちはだしたる幼子は傷ついてなくといふに、  
あてかたもない落人の悲しさ、

宿もなく食もなく雪のみつらく降りまさる。

待賢門のあらしの日より、

身をいたはるのひまもない常磐の、

そのいたましい疲れやう。

だが、またなんといふ貴い輝きの姿だらう。

つらさ悲しさをじつと堪えたるその頬に、

さんぜんとして輝くもの、

そは天地にたぐひもない、

貴き母の愛のひかり。

あゝ琴をひく度、うたふたび、

私の心によみがへり来る常磐の姿、

常磐樹の枯るる日もなく、

母の愛のきはまりもなき輝きよ。

## 松下禪尼

默然と坐したる部屋、  
つぎ多き障子の紙に腫をうつせば、  
ふと浮びくる禪尼の姿。

執権の母なる彼女の、  
破障子修補の教は、  
たしかひとつの些事ではあつた。

だが、彼女の周到なる愛は、  
その些細なる事を通して、  
時頼を至善へと導いたのではないか。

おゝ母はいつくしみ深く我等を守り、  
髪の亂れ衣の破れの些事にさへ、  
心いためてわすらひつゞける。

友よ、母の額の老いたる皺を仰げ、  
彼女の髪の白さにも、そのやつれにも、



輝くはたゞ慈惠の教ぞ。

友よ、静かに脆いて祈らう、  
我等一人びとりの禪尼の、  
その貴き愛の心を。

### 楠 滋子

「吾子よ梅檀は双葉より香高きぞ、  
幼くとも判官が子、わが子なれば  
などこれほどの理に迷はんや。」  
あゝ滋子の聲の凜たるひゞきよ。

夫の首級をむかへて、  
悲しみの極みの日、  
泪も見せず子をさとしたる滋子、

あゝ彼女は忠臣が妻、忠臣が母。

湊川、水の流れ絶ゆる日なく、

四條畷、潰ゆる日なく、

燦としてはゆる圓光のなか、

彼女のまなざしは今日も我等に笑みかける。

忠節よ、貞節よ、

永遠に日本の女の上に輝け、

麗はしき傳統は今日も絶えず、

女よ、新らしき滋子を生み、新らしき正行を生め。

## 一休が母

「藤々淡々六十年

末後膳糞捧梵天」

一休が辭世の句の、

悟道を讃仰する前に、

我等先づ彼の母の、

悲しくも壯々しき情緒と、

纏綿たる愛の遺書を讀まうぞ。

九重の雲南に北に、

干戈のやむなくつゞくとき、

うら若き身をさゝげて、

刺客の使、北朝の、

宮闕深く進み入つた、

彼女の雄々しき忠節よ、

たぐひなく芳しき決意よ。

恩愛の絆たちかねて、

同じき神の御末の君を、

かしこみおそれた苦しさに、  
たゞ誅戮をねがひもとめて、  
正しき道を行かんとしたる、  
かの女の悲壯な心のうち、  
誰かはなかずに居られやう。

『佛性の見をみがけ、

我が地獄への途を見よ、

釋迦をも達磨をも、

奴となす身ともならば、

俗もよし妄想するなかれ。』

吾子千菊へのこしたる、

彼女の文のかしこさよ。

## 政岡

こちのうらのちさの木に、ちさの木に、  
雀が三びきとまつて、

一羽の雀がいふことにや、いふことにや……

吾子がうたふ雀の歌にきゝ入る政岡がさびしい心。

夕べ呼んだ花嫁御、花嫁御、

竹の下葉を飛びおりて、

籠へ寄りくる親鳥の……

泪かみしめむせび入る政岡のくるしき心。

餌ばみをすれば子雀の、

嘴さしよる有様に、

わしが息子の千松が、千松が……

そのいたけなわきまへをなくいたましさ。

七つ八つから金山へ、金山へ、

一年までもまだ見えぬ、まだ見えぬ、

ほろりほろりとお泣きやるが、お泣きやがる……

泣くになかれぬ忠節にじつと堪えたる雄々しさよ。

榴ヶ岡の静かなる夕、

群雀のさはぎもさつて、

宮城野を吹きくる風は、

私の心をけふも政岡の追慕へと誘つて行く。

## 傳通院

友よ、傳通院の呪はれたる結婚に涙しよう、

それこそは古き傳統と因襲に、

虫ばまれたる女性の悲しいすがた、

あゝ彼女の嗚咽の聲のさびしさよ。

主を異にした彼女の生家と夫とが、

相隔てて戦はねばならなかつた因縁よ、

彼女が夫への奉仕の熱愛も、

遂に追はれたる悲しさよ。

いとけなき竹千代にわかれて、  
三世誓約の夫にわかれ、  
刈谷に歸る彼女のころ、  
死より苦しくあえいだころ。

されど彼女は廣忠がはしき妻、  
別れても彼女は竹千代が慈母、  
日は日とて夜は夜とて、

愛憐の焰は二人が上に燃やされた。

わけても彼女のころの母の愛よ、  
竹千代がつゝがなきおいたちを、  
祈らぬ日なく願はぬ夜なく、  
彼女の身はほそり心はおとろへた。

竹千代が織田に質せられたときいた日の、  
彼女が狂亂の悲しみは、  
險を冒しての心づかひは、

あゝ母のみのなし得る尊さである。

友よ、まことに徳川のかの榮こそ、

彼女の愛より生れたのではなかつたか、

傳通院の庭にたつて靜かに瞳をつぶれ、

我等の胸に彼女は無窮の愛をかたつてくれる。

嬌  
爛  
戀



## 佐用媛

出船の波止場に、

私は今日もいくたりかの、  
美しき佐用媛を見る。

繼ぎたし、つぎたしたテープも切れて、  
船上の人はさだかに見えずなつても、  
見よ、やきつく波止場の上になつて、  
彼女は泪の白布打ちふりうちふる。

三根の高根、領巾をふり、  
高麗に行く挾手彦が船、  
呼び靡いたる佐用媛が、  
別離の哀傷のまさしくと思はれる。

生別の悲しさに、  
あはれいきたゆるまで、  
領巾を振り、ひれをふる、  
愛の狂亂よ。戀の嬌爛よ。

あゝ出船の波止場、  
空高く光芒の花輪をかくるものよ、  
美しく若き佐用媛よ。

## お 夏

石つぶてさげすみふれど、  
 狂亂戀のこゝろには、  
 落葉のかるさ、  
 お夏はさやかにえまひかける。

石佛、馬子もよろし、  
 遍路もよし、  
 戀ふ人の行方もとめて、

たゞ一途、くるひ行く。

路の暗ふかくとも、  
 緋の振袖に灯ともして、  
 振袖の炬火も消えなば、  
 黒髪の火繩あみ燃り。

求めずばやまざることろ、  
 鐘は鳴り日はおちて、  
 はらはらと時雨かゝれど、

たゞ一途、戀人をまぎてはしるよ。

——帝劇十月興行處見——

お七

えんえんと燃えさかる情火の、  
 そがたゞなかに身を投げて、  
 焚かれていつたお七の顔の、  
 たぐふべくもないかゞやきよ。

敲刑よ、黥刑よ、流刑よ、  
 そはあまりにもなまやさしい、  
 狂亂戀の若人に、

焚殺刑のふさはしさ。

友禪の振袖は風をよび、  
黒髪ながく炎をまいて、  
こひごころ吉三を燃き、  
自らの身も焚きつくす。

道義、刑律一切を、  
嚴にも焼いた豪奢なる愛焰よ、  
嬌爛戀の奇しき夢よ、

空高くどよみわたれ。

## 清 姫

血の角笛、唇あかく研ぎすまし、  
 汝が喪心の哀樂を吹きならせ、  
 南風も泉も雑草も、  
 いつせいに狂舞させよ。

宇治の川瀬に水浸りて  
 生きながらに鬼となりしも女の念力ぞ、  
 長尾りゆうりゆうと鳴らし光りて、

日高川すべりゆけ、戀の清姫。

いかなる貴き聖典も、  
 焼きつく陸の廣さも海の深さも、  
 安珍を戀ひしたふ、  
 なが心の跡には及びもしない。

清姫よ。哀戀よ、  
 大蛇もよし、鳥獸もよし、  
 一念一途、かがやかにこそ狂ひゆけ、

天地の極まる日まで狂ひゆけ。

## 深雪

透く色こまやかなるは何の花ぞ、  
竹の節めぐる蔓の、なよやかに、  
深雪が杖をまさぐるおよびのごと。

夏の晨はこゝろまで滲みひかる、  
あゝ日本の蒼古な玄土に、女人のごと、  
仄かに咲くは何の花ぞ。

反魂香を紅爐に焚いて、  
 遺瀨なくうねらす風情から、  
 そつと甦りくる息づかひをきかうか。

貪婪なる虻蜂よ、

さつさと立ちさつてくれ、

うら若い盲人の戀心をふみつけるな。

あゝ夏の日の愁怨の花よ、

悲戀の深雪の精靈よ、

そのかみうたの、さても泪ぐましき。

「朝顔のてらす日かげのつれなきに

あはれ一むら雨よ降れぞかし」

あゝ哀戀ののろはしさ。



## お 里

貧苦と昏迷の中に咲く花のかんばしさ、  
夕顔の、月見草の、  
その淑やかなる色香をめでよ。

夜をこめて、山路深く、  
壺坂寺に念願の、  
お里の聖心にもたとへやう。

巷の口さがない童たち、  
今日ひとひだけでも、虚榮のための、  
不貞の姉妹の話をしてくれるな。

私もお里の忍苦の前に、  
この身この心を投げ出して、  
清冽な情思に息づいてゆかうとする。

あゝ貧苦よ昏迷よ、私をつゝめ、  
彼女の圓光は煌々と、

道は明々と展けてゐる。

お 駒

肉しまりのいい素竹に、  
稟々と雀の舌すりもなく、  
思ひあがつた茗香を焚く、地よ天よ。

こゝは有りがたき竹林、  
めぐりめぐつても戀の聖地、  
つわらつわらと清かなる光わくよ。

甘きくちづけに酔ひさむれば、  
こゝはまた刑場の中、  
幻にうかぶは磔上のお駒が姿。

めしひの親に殊勝らしい心の張り見せて、  
荒縄のはずかしさにもたえしのび、  
才三への愛の身だしなみをもつ情思。

おお私も若き戀の女人、  
でも、でも、素竹は猗々としてのび

思ひあがつた茗香を地も天も焚くよ。

さらば竹林よ、竹林よ、

刑場の矢來の構へ、

我等現世のお駒のため美しくめぐり繁れよ。

## 初花

晝深い崖腹に、  
むらさきなす炎をぬり、  
蔓草の花はひらく。

ふしぎな情愛を感じる、  
薫りよ、をのきよ、  
擁きしめたい初花の戀ごころ。

箱根山、峯涼かに壑陰り、  
潺々流るる早川の水は、  
わたしをいつかまぼろしへと誘ひこむ。

「さぞ寒かつたでござんしょう」  
足なえの夫を護り、  
車ひきゆく黒づくめの若きをみな。

ああ権現の森深く、  
こまやかにこころ強く、

紫の花は咲くであらう、今日も明日も。

さらば手折りて挿さう、

源泉いでのの熱にほてりほてりて、

若やげるこの胸に色づけるこの心に。

## おみつ

『愛の三角トライアングル形が悲しい破綻を招く』

おみつよ、おん身はそれを知つてゐたか。

熱愛する久松の心の中に、

巢ごもつたお染の艶なる影を見た日、

呪はれたる愛を悲しみなした、

おみつのこゝろのいたましさ。

三角愛の不合理を

愛の定型にもどさうために、

自ら髪をきりすてた、

その悲壯な熱涙よ。その勝利よ。

まさぐる念珠音もさみしく、

あゝ愛するがための悲しき永遠よ！

## 櫻 兒

女なれば戀しらずはつるはかなし、

されどかの櫻兒の經死の、

それにもまして呪はしきかな。

生捐いのちをてて格競あらそひかゝる二つの魂たまの、

いづれにくからぬくるしさに、

おもひあまりてえらびしみちよ。

あれみまからばあらそひの、  
 やまんとねがふわたき死よ。  
 愛すればこそ、はてし身よ。

たぐひなく愛されて、また愛されて、  
 わたき死にたる櫻兒は、  
 戀しらではてし女にまさりてかなし。

### 菟原處女

血沼壯士 ちぬま せいし これもいとし、  
 菟原壯士 うはな せいし かれもなつかし、  
 されど我 われ をとこふたりに寄らんには、  
 身一つなるを。

わがためにますらをふたり、  
 焼刀の柄おし撚り、  
 白檀弓靱とり負ひて、

競ふと聞くはわけてもかなし。

をとめと生れしこのなやみ、  
いざさらば今はせんなし、  
穴申呂黄泉にぞまたん、  
のろはれしこのうつしよよわが戀よ。

### 眞間手古奈

妻喜ひ來る勝鹿壯丁二人あり、  
何れ捨てんも罪深く、  
履もはかず髪もけずらず、  
手古奈の戀の悲しきさだめ。

うまし夢、彼と結ばゞ、  
この男いかになくらん、  
麻衣が帯これにときなば、



かの男いかにうらまん。

にくからぬ勝鹿壯丁二人あり、  
何れ捨てんも罪深く。

おもひあまりてえらびし死よ、  
手古奈の戀のかなしききはみ。

### 詩集の後に

◇この詩集は、私の「日本女性賦」完成への第一楷梯をなすものであります。従つて、そこには試作的の意味もふくまれてゐるのです。精進の後よりよき「日本女性賦」を得たいと念願して居ります。

◇この詩集出版について、紅玉堂主前田隆一氏、中西悟堂氏からうけた御厚志を、感謝してやみません。なほ、河野通勢氏が、お忙しい中を、私のために装幀の勞をおさり下さいましたことを、深く御禮申し上げます。

校了の日

大森にて

信子

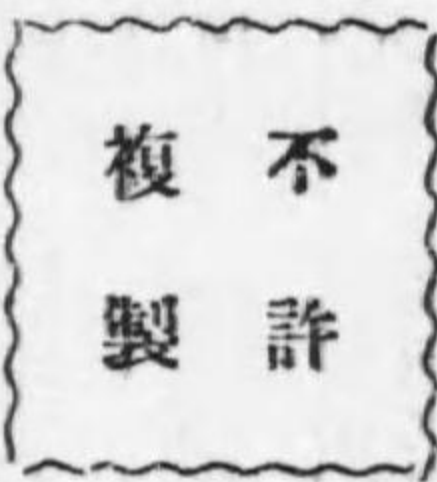
大正十五年六月十五日 印刷  
大正十五年五月一日 發行

定價金 九拾五錢

著者 中田信子

發行兼印刷者 前田隆一  
東京市日本橋區檜物町九番地

女 神 七 柱



發行所

東京市日本橋區檜物町九番地

紅玉堂書店

振替

東京三三一六番 仙臺 六〇八一番  
長野三二六八番 名古屋 一〇〇八九番

牛田 良平編	蕪村俳句全集	定價五 送費四	十 錢
同	一茶俳句集	定價五 送費四	十 錢
今中 楓溪著	歌集あかね	定價二圓 送費八	二十 錢
植松 壽樹著	歌集庭燎	定價二圓 送費八	三十 錢
加藤 介春著	詩集眼と眼	定價二 送費八	圓 錢
高橋 新吉著	詩集祇園祭り	定價九 送費八	十五 錢
佐藤惣之助著	新民論集浮れ鴛鴦	定價九 送費八	十五 錢
伊藤 喬信譯	ボオ全詩集	定價九 送費八	十五 錢

尾山篤二郎著	處女歌集	定價一圓 送費十	八十 錢
半田 良平著	歌集野づかさ	定價二 送費十	圓 錢
土岐 善麿著	歌集緑の斜面	定價二圓 送費十	五十 錢
新島 榮治著	詩集濕地の火	定價一圓 送費八	三十 錢
同	同隣人	定價一圓 送費八	五十 錢
若目田三郎譯	ロシア詩集幻の鐘	定價九 送費六	十 錢
浦瀬 白雨譯	現代英米詩選	定價一圓 送費八	五十 錢
西村 陽吉著	歌集第一の街	定價一圓 送費十	九十 錢

牛田 良平著	芭蕉俳句新釋	定價三圓五十錢 送費十錢
同 編	季題別 芭蕉俳句全集	定價三圓五十錢 送費二錢
服部 亮英著	漫畫 もぐらもち	定價二圓 送費八錢
村田 光烈著	土を流るる永遠の愛	定價二圓 送費十二錢
尾山篤二郎著	歌集 草籠	定價二圓五十錢 送費十錢
中西 悟堂著	國史 源平盛衰記	定價八圓五十錢 送費八錢
尾上 柴舟著	歌集 朝ぐもり	定價二圓五十錢 送費十錢

◇詳細目録は葉書に依つて「紅玉堂」にイムス  
を御申込願ます

勝田 香月著	惱知る頃	定價九圓十五錢 送費六錢
尾山篤二郎著	萬葉集物語	定價一圓八十錢 送費八錢
同	歌はかうして作る	定價一圓廿錢 送費八錢
金子 光晴譯	近代佛蘭西詩集	定價一圓六十錢 送費八錢
小田切浪彦著	歌集 しほさゝぬ	定價一圓八十錢 送費八錢
勝峰 晋風校	芭蕉一葉集	定價三圓九十錢 送費十錢
植松 壽樹編	萬葉調短歌集成(一)	定價二圓八十錢 送費十二錢
同	同(二)	同

窪田 空穂著 歌集 泉のほとり	尾山篤二郎著 短歌 五十講	松村 英一編 現代 一万歌集	松原 至大著 詩集 海の愛	同 詩集 哀別	勝田 香月著 詩集 さびしき人々へ	進藤 延著 硬球テニス の軟球智識と競技	服部 亮英著 スケッチと漫画 自在
定價 八圓 送費 八錢	定價 二圓三十錢 送費 十錢	定價 二圓三十錢 送費 十錢	定價 八圓十五錢 送費 六錢	定價 一圓二十錢 送費 六錢	定價 九圓十五錢 送費 六錢	定價 一圓三十錢 送費 八錢	定價 一圓三十錢 送費 六錢

終

